

入館無料

# 人物でたどる 取手の明治維新



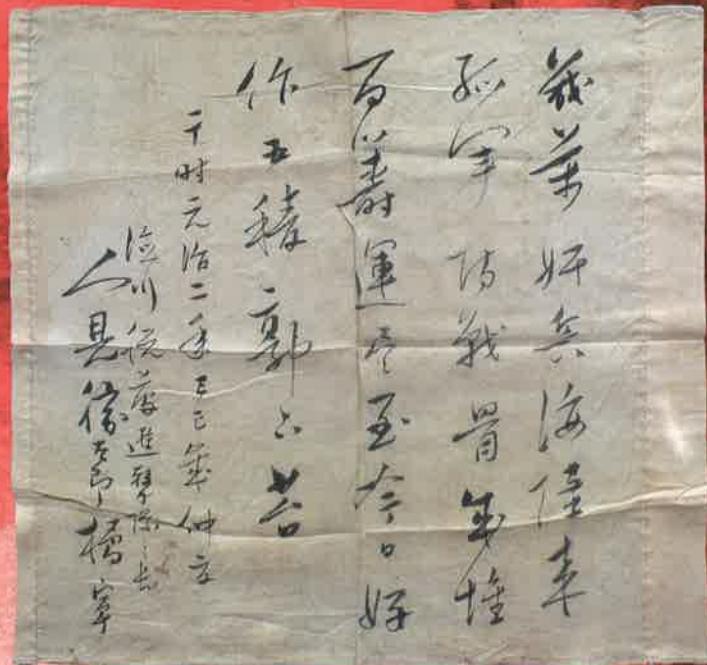
平成30年

7月17日(火)~

9月24日(月) 振替休日



箱館戦争当時の遊撃隊長人見亨(後の茨城県令、人見亨則氏所蔵)



人見亨が箱館戦争で使用した指揮旗(人見亨則氏所蔵)

**時間** 午前9時から午後5時まで(入館は4時30分まで)

**休館日** 会期中の月曜日、ただし9月17日(月・敬老の日)と  
24日(月・振替休日)は開館し、9月18日(火)と25日(火)は休館

## 開催にあたって

平成30年は、明治元年から150年目の節目の年にあたります。今回の企画展では、幕末・明治維新の激動の時代を万死を出でて一生を得ながらくぐり抜け、続く近代国家成立の転換期を駆け抜けた取手にゆかりのある人びとを紹介し、取手の明治維新に迫ります。

京都等持院の足利三代将軍の木像の首を三条河原にさらした宮和田勇太郎胤影をはじめとし、西郷隆盛の知遇を得て赤報隊を組織して年貢半減を触れながら東山道を江戸に進撃しつつも、偽官軍の汚名を着せられ刑場の露と消えた相楽総三など、人物と取手とのかかわりから明治維新の光と影の両面を見て行きます。

最後になりましたが、今回の企画展の開催にあたりご協力をたまりました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成30年7月

取手市埋蔵文化財センター

### 講演会

演題：「相楽総三とその顕彰運動」

講師：岩立将史先生（公益財団法人 徳川記念財団学芸員）

日時：9月8日（土）、午後1時30分から3時まで

### 歴史講座

第1回 演題：「慶応4年4月の取手 -土方歳三と徳川慶喜-」

日時：7月28日（土）、午後1時30分から3時まで

第2回 演題：「取手はかつて千葉県だった -茨城県になるまでの取手-」

日時：8月25日（土）、午後1時30分から3時まで

講演会・歴史講座共通事項

会場：福祉交流センター多目的ホール（取手市役所敷地内、取手市寺田5139）

定員：150名、当日受付順、開場は午後1時、無料

### 展示説明

午前11時と午後2時から：7月22日、8月5・18・19日、9月2・15・24日

午前11時から：7月28日、8月25日、9月8日

## 例言

1. このパンフレットは、平成30年7月17日から9月24日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第44回企画展「人物でたどる取手の明治維新」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。

岡田徳幸、渋谷経重、人見寧則、城之内景子、新保國弘、染野修、竹内孝明、立野晃、根本浩志、平本群子、広瀬篤、宮和田春子、鎌ヶ谷市郷土資料館、五稜郭タワー株式会社、札幌市公文書館、下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館、公益社団法人諏訪教育会、中央公論新社、東京大学史料編纂所、土方歳三資料館

### 主な参考文献

『取手市史』通史編Ⅱ・Ⅲ、『同』近世史料編Ⅲ・近現代史料編Ⅰ、『藤代町史』通史編、取手市埋蔵文化財センター第4回企画展「取手ゆかりの人びとの書」・第6回企画展「葛飾・印旛・千葉県時代の取手」・第11回企画展「広瀬誠一郎と利根運河」・第25回企画展「幕末・明治維新期の取手」各解説パンフレット

鎌ヶ谷市郷土資料館『慶応四年・明治元年の記憶in鎌ヶ谷』

尾崎三良『尾崎三良自叙略伝』、信濃教育会諏訪部会『相楽総三関係文書集』、西澤朱実『相楽総三・赤報隊史料集』、西村文則『広瀬誠一郎伝』、長谷川伸『相楽総三とその同志』、宮和田保『宮和田光胤一代記』、森田美比『茨城県政と歴代知事』

# 1. 宮和田勇太郎胤影 (天保10年: 1839~明治10年: 1877)

嘉永6年(1853)6月、アメリカ東インド艦隊司令長官のペリーは浦賀(横須賀市)に来航し、日本に開国を迫りました。幕府は、翌安政元年(1854)に再度来航したペリーと3月に日米和親条約を結び開国し、安政5年6月には日米修好通商条約を結び貿易が始まります。孝明天皇の勅許を得ずに通商条約を結んだ大老井伊直弼への非難が高まると、井伊大老は反対派を大弾圧しますが(安政の大獄)、万延元年(1860)3月には水戸浪士に暗殺されます(桜田門外の変)。井伊大老が暗殺されると、京都では尊王攘夷派による幕府側の人びとへの報復が始まりました。そして文久3年(1863)2月23日の朝、京都等持院に安置されていた足利三代將軍(尊氏・義詮・義満)の木像の首が、三条河原にさらされる事件が起きます。京都守護職の会津藩主松平容保は激怒して、犯人の逮捕を厳命します。首謀者は、意外に早く2月26日の夜に潜伏場所を急襲されて捕らえられます。

首謀者の一人に、宮和田村出身の宮和田勇太郎胤影がいました。宮和田家は宮和田村の草分けで、代々名主や本陣を務める豪農でした。足利將軍木像梟首事件にかかわった人びとは、出身地も身分もさまざまでしたが、皆平田派国学の門人でした。勇太郎の父宮和田又左衛門光胤は、剣を千葉周作に学び北辰一刀流の免許皆伝を受け、また平田派国学の門人でした。勇太郎も、父と同じく剣を千葉周作に学ぶとともに平田派国学を学びました。

さて松平容保は犯人を厳罰に処そうとしましたが、結局は身分に応じて入獄や大名家への御預けとなりました。伊勢国の菟野藩に預けられた勇太郎は、慶応3年(1867)12月に許されましたが、再び世に出た時は、すでに幕府は倒れ、新政府が成立していました。

この足利將軍木像梟首事件は、外国を打ち払おうとする尊王攘夷運動が、攘夷を実行できない幕府を倒そうとする尊王倒幕運動に転換する画期となったと言われています。



大蘇(月岡)芳年「名譽新談 宮和田勇太郎」(取手市教育委員会所蔵)



京都三条河原にさらされた足利三代將軍(右から尊氏・義詮・義満)の木像の首(東京大学史料編纂所所蔵「風説集」9)、写真提供 中央公論新社、写真パネルで展示します)

## 2. 相楽総三 (天保10年:1839~慶応4年:1868)

相楽総三はくめぎ 桐木新田の小島家の出身で、本名は小島四郎左衛門将満まさみつです。当時の小島家は近隣にその名が聞こえた豪農で、江戸の赤坂に屋敷を有し、相楽もここで生まれました。

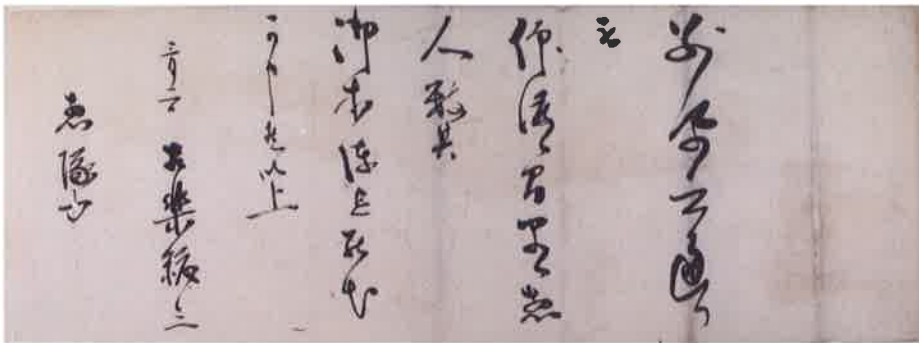
相楽は、各地で尊王攘夷の志士たちと交流し、京都では薩摩藩の西郷隆盛・大久保利通、土佐藩の板垣退助と、親しく交わりました。こうして慶応3年(1867)、相楽は江戸にもどり、薩摩藩邸を拠点に浪士隊を結成します。ここで浪士隊に加わったのが、下総国葛飾郡佐津間村(鎌ヶ谷市)の名主家出身の渋谷総司でした。

相楽は江戸で、幕府の御用商人や外国貿易で利益を上げている商人から軍資金を取り立てるなど、江戸の治安悪化工作を行います。ついに慶応3年12月25日、幕府は薩摩藩邸を攻撃、相楽らは江戸を脱出して薩摩藩の軍艦で京都に向かいます。

この薩摩藩邸攻撃事件が、慶応3年12月9日の王政復古の大号令の後、京都二条城を出て大坂城に退去していた15代将軍徳川慶喜をはじめとする旧幕府側に伝わると、翌慶応4年1月、旧幕府軍は「討薩表」とうさつひょうをかかげて京都に進みます。1月3日、京都南郊の鳥羽・伏見で旧幕府軍と新政府軍が衝突し、ここに武力倒幕派は目的を達しました。

京都に戻った相楽は、西郷からの指示で赤報隊を結成し、年貢半減を布告しながら東山道を江戸に向けて進軍します。しかし新政府は財政難から年貢半減を撤回し、赤報隊を偽官軍として闇に葬ろうとします。こうして3月1日、相楽は下諏訪で捕らえられ、弁明の機会もないまま、3月3日、渋谷はじめ同士7人とともに斬首されてしまいます。

相楽の孫の木村亀太郎は、祖父の冤罪を晴らそうと窮乏の中で運動を続けます。ついに昭和3年(1928)の昭和天皇即位の御大典にあたり、相楽には正五位、渋谷には従五位が、他の赤報隊関係者10名も贈位され、赤報隊の偽官軍の汚名は晴らされました。



(慶応4年)3月2日 相楽総三書状(諏訪教育会所蔵、写真提供 下諏訪町立諏訪湖博物館、写真パネルで展示します)3月1日に捕らえられた相楽が、赤報隊の隊士たちを下諏訪宿本陣まで出頭するように伝えていました。相楽は、弁明の機会が与えられれば嫌疑は晴らせると確信していたようですが、その機会を得ないまま翌3日に処刑されてしまいます。



魁塚 この碑は明治3年に、相楽らの同志であった落合直亮や丸山徳五郎らによって建立されました。



相楽総三遺族写真(所蔵、写真提供 下諏訪町立諏訪湖博物館)右から総三の父の小島兵馬、子の木村河次郎、姪の彦坂てい子、姉の木村はま子です。明治6年頃に撮影されたものを、大正6年に複写したものです。



木村亀太郎と魁塚(所蔵、写真提供 下諏訪町立諏訪湖博物館)大正5年4月3日の撮影です。

### 3. 箱館五稜郭に集う人びと

慶応4年(1868)1月3日、京都南郊の鳥羽・伏見で、旧幕府軍と薩摩藩・長州藩を主力とする新政府軍が戦闘を交えました。これが翌明治2年(1869)5月の箱館五稜郭の開城まで続く、戊辰戦争の始まりです。4月11日、江戸城が開城され、新政府軍が江戸城に入りました。そしてこの日の早朝、徳川慶喜は寛永寺大慈院を出て、新たな謹慎先と定められた水戸に向かって出発します。

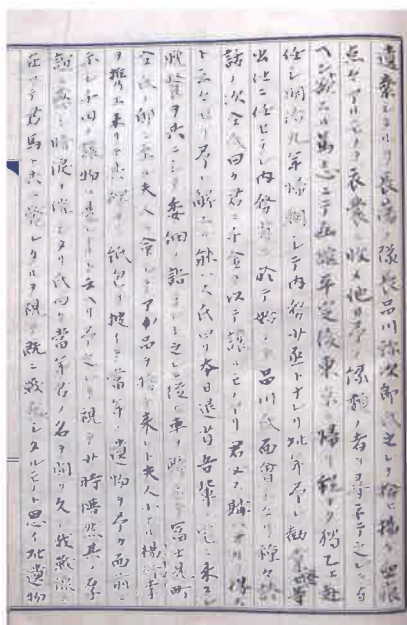
しかし江戸開城を前後して、これに不満をいだく旧幕府の人びとは江戸を離れ、新政府軍と一戦を交えようと各地に散っていきます。4月2日、近藤勇・土方歳三に率いられた新選組が流山に入ります。流山に旧幕府の部隊が入ったことを察知した新政府軍は、翌3日流山を囲み近藤を捕らえます。土方は江戸へ出て近藤の救出に奔走しますが、かないませんでした。土方は、市川国府台(市川市)に集結した大鳥圭介軍に加わり、先鋒軍の副隊長となり宇都宮・日光をめざします。その途中土方は布施(柏市)で利根川を渡り、戸頭を通過して守谷・水海道・石下・下妻・下館と進んでいったのです。土方は、明治2年5月11日に箱館五稜郭で戦死しました。この時34歳でした。

また鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の一員として戦った人見寧(写真は表紙)は、江戸にもどり遊撃隊隊長として各地を転戦、後に江戸を脱走した榎本武揚の艦隊に合流して北海道に渡りました。翌明治2年、箱館五稜郭に立て籠もり新政府軍に最後の戦いを挑みます。この時人見は、胴巻の白羽二重を切り指揮旗としました(写真は表紙)。旗には、「幾万の奸兵海陸より来る孤軍防戦し骨は堆を成す 百壽の運は尽きて今日に至る 好し五稜郭下の苔とならん」の七言絶句が書かれています。人見は顔に重傷を負いますが、一命はとりとめました。指揮旗は、長州藩の品川弥二郎が拾い大切に保管して、明治9年に人見に返却されています。

平成22年(2010)に公開された映画「桜田門外ノ変」や吉村昭氏の原作には、桜田門外の変に加わった水戸藩士関鉄之介が、蝦夷地(北海道)への渡航を依頼する人物として水原寅蔵が出てきます。水原は近江国の生まれで、越後国水原村(現新潟県阿賀野市)を拠点に活躍しました。後に蝦夷地に渡り箱館五稜郭の建設に従事し、維新後は黒田清隆の知遇を得て北海道の開発に尽力しました。水原のご子孫のもとには、黒田から水原に贈られた書が守り伝えられています(写真は裏表紙)。



土方歳三(所蔵:写真提供 土方歳三資料館)



大正元年9月「人見寧履歴史書」(人見寧則氏所蔵) 明治9年に品川弥二郎の屋敷に招かれ、箱館戦争で使用した指揮旗の返却を受けたことが書かれている頁です。



大正2年発行の『北海道温故写真帖』第1集に所収の水原寅蔵の肖像写真(写真提供 札幌市公文書館)

## 4. 広瀬誠一郎と勝海舟

広瀬誠一郎は天保8年(1837)に、代々下高井村の名主を務める家に生まれました。明治維新後はさまざまな公的な役職を歴任し、地方自治の先駆者として、また民権思想の普及者として、下高井村や周辺地域の発展と近代化に努めるとともに、殖産興業にも励みました。明治12年(1879)に県会が開設されると、広瀬は北相馬郡選出の初代の県会議員に当選しました。明治15年には北相馬郡長に転じ、岡堰の改修に取り組みます。

広瀬が次に取り組んだのが、利根運河の開削です。江戸時代以降、利根川を使って船で荷物を東京まで運ぶには、まず千葉県の間宿までさかのぼり、ここから江戸川を下らなければなりません。そのため、二つの川を短絡する運河を計画したのです。

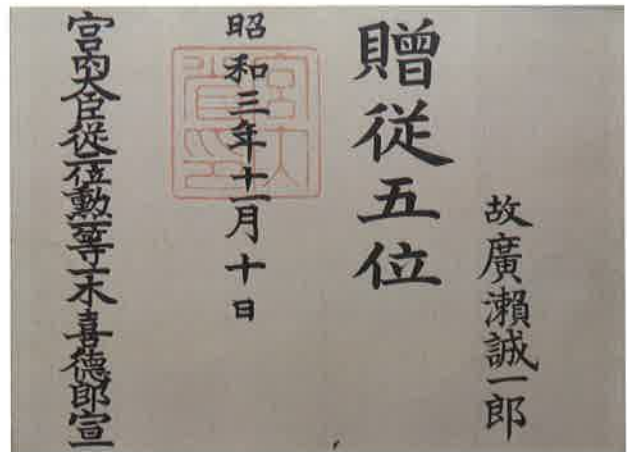
広瀬とともに利根運河開削の事業に取り組んだのが、先に紹介した人見寧です。人見は、箱館戦争の後は東京で投獄生活を送りましたが、許されてからは新政府に出仕し、内務卿大久保利通の勤めで内務省に入り殖産興業政策に邁進します。明治12年5月に茨城県大書記官となり、翌13年3月に県令に進み、以後5年4か月にわたって県政を担いました。

明治19年9月、北相馬郡長を辞した広瀬は、民間会社を興し利根運河開削を実現しようとしています。そして加波山事件の責任を負い茨城県令を非職となった人見を訪ね、社長就任を懇願し、人見は利根運河会社の社長となります。明治20年2月18日、勝海舟のもとを人見ともう一人の人物が訪ねたことが、勝の日記に見えます。この人物は、広瀬と考えられます。広瀬のご子孫宅には、明治20年初春に広瀬氏の囑しよく(たのみ)で書いたとの為書ためがきがある勝の書が伝わっています。人見は勝を終生師と仰ぎ、利根運河開削についても助言や助力を請いに訪ねたのでしょう。

広瀬は利根運河完成直前の明治23年3月18日、かねてからの持病に心労や疲労が重なり急死しました。人見は、大正11年(1922)12月31日、東京麻布の自宅で80歳の生涯を閉じました。人見を介した広瀬と勝のつながりからは、歴史の余薫が感じられます。



広瀬誠一郎(中央、広瀬篤氏所蔵)



昭和3年11月10日 広瀬誠一郎位記(広瀬篤氏所蔵)  
利根運河開削などの功績により、広瀬は従五位を贈位されました。



明治20年 勝海舟書「独養其志」(独り其の志を養う、広瀬篤氏所蔵) 広瀬氏の囑(たのみ)で書いたとの為書があります。

## 5. 平本家別荘「三階」に集う人びと

明治32年(1899)6月15日、尾崎<sup>きぶろ</sup>三良、重野<sup>やすつぐ</sup>安繹、土方久元らは、井野村吉田の平本正志の招きにより取手を訪れ、取手駅の西側にあった平本氏の別荘に泊まりました。このことは、尾崎の自伝『尾崎三良自叙略伝』に記されています。尾崎は天保13年(1842)に現在の京都市に生まれ、三条実美に仕えました(大正7年:1918没)。幕末には尊王攘夷運動に挺身し西郷隆盛や坂本龍馬と交流し、維新後は政界や財界で活躍しました。また当時平本家では、駅の西側に「三階」と呼ばれた三階建ての洋館を有していました(写真は裏表紙)。平本家は吉田村の草分けで、江戸時代初めから代々名主を務めていました。

重野安繹は、文政10年(1827)に薩摩藩の郷土の家に生まれました。薩英戦争の講和談判委員などを務め、維新後は修史局、後に修史館に勤め、近代歴史学の導入と確立に大きな功績をあげました。東京帝国大学教授や貴族院議員にもなり、晩年は歴史学会の長老として重きをなしました。明治43年に亡くなりました。

土方は、天保4年に土佐藩の郷土の家に生まれ、尊王の志士として活躍しました。三条実美にしたがい薩長同盟の成立に尽力し、維新後は農商務大臣や宮内大臣となって政界で活躍し、また国学院大学や東京女学館の学長となり教育界でも活躍しました。大正7年に亡くなりました。

平本家には、重野の筆になる「清寂養和」<sup>せいじやくようわ</sup>や土方の筆になる「取手八景」の書(写真は裏表紙)が伝わっています。尾崎・重野・土方らと平本家のつながりは、幕末維新期を駆け抜けた中央の著名な人物と、地方の有力者との交流を物語るエピソードの一つと言えます。また明治21年には、平本清作の墓碑を重野が書いており、この頃にはすでに重野と平本家のつながりがあったことがうかがえます。



重野安繹(国立国会図書館ウェブサイト「近代日本人の肖像」から)



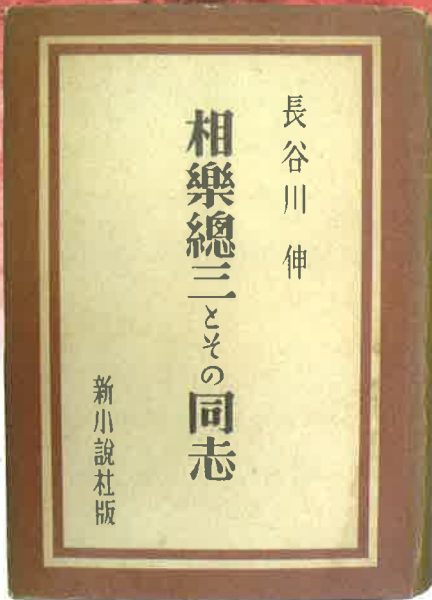
重野安繹の筆になる平本清作墓碑



土方久元(国立国会図書館ウェブサイト「近代日本人の肖像」から)



重野安繹書「清寂養和」(平本群子氏所蔵)



昭和18年5月刊『相楽総三とその同志』（個人蔵）  
著者の長谷川伸は、この作品を「紙の記念碑」、  
「筆の香華」と呼びました。



昭和32年4月刊『相楽塚の話』  
（渋谷経重家文書、写真提供 鎌ヶ谷市郷土資料館）  
相楽らの90回忌にあたり、当時の下諏訪町立博物館が  
刊行しました。この本には、赤報隊関係の史料や、  
木村亀太郎・渋谷貴重の回想談などが収録されています。



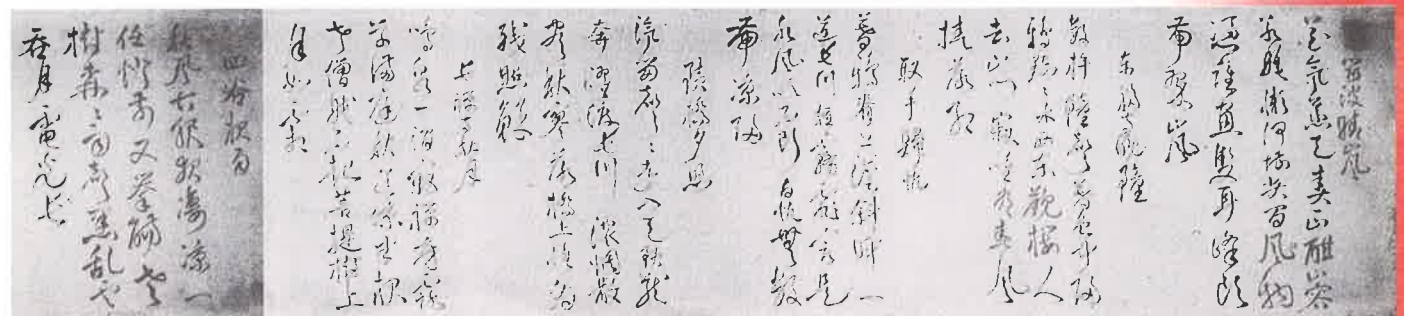
人見寧（人見寧則氏所蔵）晩年の撮影です。  
人見が着用している大礼服の現物を展示します。



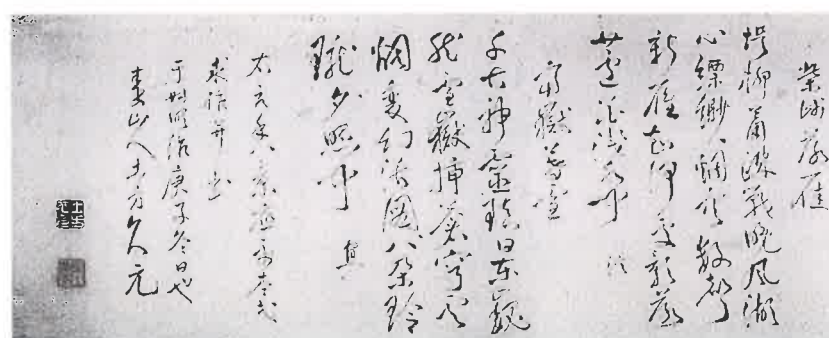
黒田清隆書「百事諧」（城之内景子氏所蔵）水原君の清嘯（清いたのみ）で書いたとの為書があります。



四翁表功之碑（写真提供 札幌市公文書館）札幌市の中島公園に建立された碑で、水原はじめ北海道の開拓に功績があった4人を顕彰しています。



土方久元書「取手八景」（平本群子氏所蔵）



平本家の別荘「三階」（取手市教育委員会所蔵）

